

第2章 ラトヴィア語のアスペクト

本章では、第1章で概説した動詞接頭辞が深く関わるアスペクトを論じる。接頭辞が関与する PFV・IPFV のアスペクト対立、アスペクト対立をなさない量・時間的意味の接頭辞が付加された動詞やアスペクト対立に中立的な接頭辞動詞を概略し、先行研究ではあまり指摘されてこなかったアスペクトの意味的対立の側面やそれが中和される場面、アスペクト対立をなす動詞の統語的問題やアスペクト対立の相対性についても論じる。このアスペクト対立の相対性は、第3章で論じる借用語の動詞の PFV 化を解釈する上で重要となる。

2.1. アスペクト

アスペクトは言語により表現手段が異なり、その概念の理解も様々である。しかし一般にアスペクトとは、「状況の内的時間構造の様々な見方」である (Comrie 1976, 4)。発話時点を起点とした時制に関わらない、動作の時間的な展開であるアスペクトには、動作の開始、進行、終了といった動作の局面に注目したアスペクトもあれば、動作の回数 (複数回か一回か) に注目したアスペクト、動作時間の長短、動作の程度や集中性 (強さ、弱さ) に注目したアスペクトや、動作が突然行われるのか、または少しずつ行われるかといったアスペクト、動作が習慣的に行われるかを示すアスペクトもある。

これらの動作に対する様々な時間的な見方の中で、最も抽象度の高いアスペクトには PFV と IPFV があり、この2つのアスペクトは対立をなす。以下に、Comrie の例文を引用して説明をする (Comrie 1976, 4)。

英語 : John read that book yesterday ; while he was reading it, the postman came.

フランス語 : Jean lut ce livre hier ; pendant qu'il le lisait, le facteur vint.

ロシア語 : Ivan pročítal ètu knigu včera ; v to vremja, kogda on ee čítal, prišel počtal'on.

日本語訳で「ジョンは昨日本を読んだ。彼がそれを読んでいた時、郵便配達人が来た」にあたるこれらの例文では「読む」にあたる動詞が2度出てくるが、それぞれの動詞の表現は異なっている。

最初の「読んだ」では、読むという行為が「完全な事象 (complete event)」として表されているのに対し、次の「読んでいた」では郵便配達人が来た時点の背景として、進行中の「読む」という行為が示されている (Comrie 1976, 4)。前者のように、動作を完全なものとして外側から見るアスペクトは PFV、後者のように、動作を継続しているものとして内側からの視点で表すアスペクトは IPFV とされる。

通言語的に、アスペクトは文法カテゴリーとして独立して表される言語、時制と融合して表される言語、文法的な言語手段ではなく、意味カテゴリーとして表される言語などが

ある。アスペクトが文法カテゴリーとされる代表的な言語は、接頭辞や接尾辞などで形態的に表現される完了体・不完了体 (PFV・IPFV に相当) の対立が多く動詞に存在する、ロシア語のようなスラヴ諸語である。

Comrie の挙げた例文では、2 つの「読む」に対してロシア語では完了体・不完了体、英語では動詞の一般的な形と be 動詞+ing の分析的表現が、フランス語では単純過去形と半過去形がここでは PFV・IPFV の対立を表している。一般に状況は動詞によって示されることから、アスペクトの表現は動詞が担うことが多い。しかしフィンランド語のように、動作の目的語の格の違いなどによってアスペクトの対立を表現する言語もある。

このようにアスペクトは、動詞レベルのみで表れる「文法的・形態的カテゴリー」だけでなく、統語的手段や語彙的手段といった、動詞レベルにとどまらない言語手段でも示される「機能・意味的領域」と広く理解される (Maslov 1978, 10)。

アスペクトには、抽象度の高い PFV・IPFV の対立をなすアスペクトだけでなく、より具体的なアスペクトの意味に分類されるアスペクトもある。これらのアスペクトはスラヴ諸語を中心にアクツィオンスアルト (Aktionsart) と呼ばれ、「動作の経過を量的・質的に明確化し、結果性を一定の形態素、もしくは複数の形態素により特徴づけることで、無接頭辞動詞が示す動作を修正する」ものである (Avilova 1976, 266)¹⁸。つまりアクツィオンスアルトとは、接頭辞と接尾辞によりアスペクトの意味を示す語を派生させる派生形態論のカテゴリーである。

一般にアクツィオンスアルトは、完了体・不完了体のアスペクト対立が文法カテゴリーであるスラヴ諸語のアスペクト論の中で論じられてきた。完了体・不完了体の対立がより抽象的であるのに対し、アクツィオンスアルトは具体的なアスペクトの意味に基づいた接辞による意味分類であり、より語彙的性格が強いカテゴリーである。よって、完了体・不完了体の対立を持つ体と細かい意味分類を持つアクツィオンスアルトは、それぞれ“文法的なアスペクト”と“語彙的なアスペクト”として一般に捉えられてきた。

アスペクトが文法として、または語彙としてその言語で表されるかは、文法と語彙の境界線の引き次第で解釈が変わってくる。次節 2.2. で見るラトヴィア語のアスペクト論でもこの問題は存在している。

¹⁸ 接辞 (接頭辞・接尾辞) の有無に関わらず、動詞すべての意味を限界性と非限界性に分け、さらに動詞が表す動作の時間内における経過と分配の観点からアクツィオンスアルトを分類する立場もある (Šeljakin 2007, 67-85)。

Avilova と Šeljakin の見解の違いは、基動詞に接辞付加という形態操作を施すことで派生した動詞のみを考察の対象とする、形態による意味分類なのか、それとも状態動詞、関係動詞、展開動詞、状態への移行動詞や、形態操作を受けていない基動詞も考慮に入れた意味分類なのか、という点である。後者の場合、形態以外の意味にも注目した、より広範にわたり細分化された意味分類となり、アクツィオンスアルトの下位分類は 50 近くに達している。ちなみに Avilova による下位分類は約 20 である (Avilova 1976, 272)。

本論文では動詞接頭辞を研究対象としていることから、形態を重視した Avilova によるアクツィオンスアルトの定義を採用している。

2.2. ラトヴィア語学のアスペクト研究 — “見出された” カテゴリー

ある言語の文法記述が、その言語内の様々な事象をカテゴリーとして取り出して整理していくことだとすると、文法記述をする者の母語や精通する言語の特徴が、記述のあまり進んでいなかった他の言語の記述に少なからず影響を及ぼすことはあり得るであろう。ラトヴィア語のアスペクト理論の発展の歴史を紐解くと、ラトヴィア語のアスペクトはその一つの例であることがわかる。通言語的には、時制や語彙的手段のように多種多様な表現がなされるにも関わらず、ラトヴィア語のアスペクトの記述はアスペクトを文法カテゴリーとするロシア語のアスペクト理論の影響を強く受けてきたからである。

リトアニア語¹⁹を含むバルト諸語の動詞アスペクト理論の発展²⁰について、「初期のバルト諸語の記述では、アスペクトのカテゴリーは言及されていない。初期のバルト諸語の文法記述者はドイツ人であり、アスペクトのカテゴリーがないドイツ語やラテン語の文法体系がバルト諸語の研究に持ち込まれた。本格的にこの問題が始まったのは19世紀末、バルト諸語とスラヴ諸語の動詞体系の比較歴史研究が始まってからである」とされる (Staltmane 1958b, 13)。

ラトヴィア語の文法記述は、17世紀から18世紀にかけてドイツ人の宣教師や言語学者によって始まった。その後比較言語学、またアスペクト理論そのものが発展するに従い、バルト諸語と近縁関係にあり、「体」という文法カテゴリーとしてのアスペクトの記述が整理され始めていたスラヴ諸語（特にロシア語）との比較対照研究により、バルト諸語にも「アスペクト」というカテゴリーが“見出される”ことになった。一見すると、接頭辞という類似した形態的アスペクト表現をするラトヴィア語に、スラヴ諸語の持つ完了体・不完了体というアスペクト対立のモデルがラトヴィア語にもそのまま適応されることになったのである。

「アスペクト」という用語はラトヴィア語で *veids*²¹ とされる。アスペクトは PFV・IPFV に分けられ、スラヴ語学の「完了体」「不完了体」に相当する *pabeigtais veids* / *nepabeigtais veids* という用語が用いられる。このほかにも *aspekts* や *perfektīvs* / *imperfektīvs* といった国際的用語が併用される。

Endzelīns はロシア語と比較したラトヴィア語のアスペクトについての論文を1909年にロシア語で書いているが、そこではロシア語のアスペクト *vid* 「体」の用語をそのままラトヴィア語の現象に対して用いている (Endzelīns 1974)。

『標準語文法』のアスペクトカテゴリー (Veida kategorija) の項目では、アスペクトは「動詞により表された動作の文法的特徴づけ」(『標準語文法』 1959, 564-582) とされ、アスペ

¹⁹ リトアニア語のアスペクト研究については、Paulauskienė が詳しい (Paulauskienė 1979, 55-83)。またアスペクトと時制の関係については櫻井を参照されたい (櫻井 2010)。

²⁰ スラヴ諸語におけるアスペクト研究の歴史も絡めた、バルト諸語のアスペクト研究の詳細な歴史については Staltmane を参照されたい (Staltmane 1958b, 4-22)。

²¹ 名詞 *veids* は動詞 *viest* 「気づく、感じる、見える」から派生した名詞で、リトアニア語の *veidas* 「顔、頬」、ロシア語の *vid* 「外見、(動詞の) 体」、サンスクリット語の *véda* 「知識、意識」、ギリシャ語の *eidos* 「顔、外見」に対応している (『ラトヴィア語語源辞典 (Latviešu etimoloģijas vārdnīca)』 2001, 1134)。

クトが時制や法と同様に、動詞に関わる文法カテゴリーとして定着することになる。

ラトヴィア語のAspect研究を広範に行った最初の、そして現在のところ最後の研究者は Staltmane である。彼女は博士論文『現代ラトヴィア標準語における動詞Aspect (Verbu veidi mūsdienu latviešu literārajā valodā)』を執筆している (Staltmane 1958d)。この博士論文の骨子となっているのは、『現代ラトヴィア標準語におけるPFVとIPFVの動詞の文法的特徴 (Perfektīvā un imperfektīvā veida verbu gramatiskais raksturojums mūsdienu latviešu valodā)』、『現代ラトヴィア標準語における接頭辞動詞のAspect的意味 (Priedēkļa verbu veidiskās nozīmes mūsdienu latviešu literārajā valodā)』、『現代ラトヴィア標準語における動詞Aspect (Verbu veidi mūsdienu latviešu literārajā valodā)』、『現代ラトヴィア語における2つの動詞Aspect (PFVとIPFV)の相関の可能性 (Divu verbu veidu (perfektīvā un imperfektīvā) korrelācijas iespējas mūsdienu latviešu valodā)』の4つの論文である (Staltmane 1958a, 1958b, 1958c, 1959)。また博士論文とは別に、Aspectの意味をどのように辞書記述すべきかも考察している (Staltmane 1961)。

接頭辞による形態的なPFVの標識を持つ動詞のAspect研究を展開した Staltmane は、Aspect的意味やその表現に文法的な性質、言い換えれば非語彙的な性質を見出し、PFV・IPFVのAspect的意味を語彙的意味から区別している。一方で、PFV・IPFVの対立を持つ(より)文法的なAspectと(より)語彙的なAspectであるアクツィオンスアルトの境界を段階的とし、その明確な区別が非常に難しいこと、さらに文法的なAspectの要であるPFV・IPFVの対立自体がラトヴィア語のすべての動詞には及んでいないことから、ラトヴィア語のAspectを「規則ではなく傾向として表される語彙・文法カテゴリー」とした (Staltmane 1958d, 266)。

Aspect的意味と語彙的意味の区別には、より抽象度の高い文法的意味と語彙的意味の対立という構図が想起される。StaltmaneによるAspect研究の背景には、Aspectが文法化され、Aspect的意味が文法的意味とされるおかげで、Aspectの文法的意味と語彙的意味の区別がしやすいロシア語のAspect体系の解釈の影響がみられる。

完了体・不完了体の用法や、完了体の持つ限界性、全一性といった意味特徴、それぞれの体の不変的意味の追求といった、1960年代から1980年代までのロシア語学のAspect理論の発展とは対照的に、ソ連時代のラトヴィア語学のAspectの研究は博士論文の執筆後に研究領域を変えた Staltmane 以降ほぼ皆無に近く、彼女ほどラトヴィア語のAspectを詳細に扱った研究者は今日まで他に見当たらないといっても過言ではない。

Staltmane 以外で、ソ連時代にAspect研究を行ったのは Hauzenberga-Šturma と Soida である。Hauzenberga-Šturma は、Aspect研究に時制、人称、文体論といった様々な視点を考慮に入れる必要性を指摘している (Hauzenberga-Šturma 1979)。

Aspectを語形成論の立場から扱った Soida は、Staltmane が研究の当初、Aspect対立を成す動詞を同じ語の異なる語形とし、文法的Aspectと語彙的Aspectであるアクツィオンスアルトを分けつつも、最終的には語彙的Aspectを中心に扱う語形成の

枠組みの中で文法的アスペクトを捉えていることを批判している (Soida 2009²², 225)。この Soida の批判の背景には、同じ語の語形変化である形態論と、新たに派生した語彙を扱う語形成論を同時に論じるべきではないという考えがある。一方で Soida は、Staltmane ほどにはアスペクト自体の概念には踏み込んでおらず、アスペクト対立やその対立の文法的側面は不明確なままとなっている。

しかし、対立するアスペクトに文法的な抽象度が欠けることで、語彙的なアクションスアルトに近くなり、対立するアスペクト (“文法的に表される” とされるアスペクト) とアクションスアルト (“語彙的に表される” とされるアスペクト) の区別が明確でなくなることは、Staltmane にも Soida にも共通した見解となっている (Staltmane 1958d, Soida 2009)。

ある言語事象を共時的に文法カテゴリーとして捉えるべきか、また通時的には、文法化へ志向するか、逆に語彙化へ志向するか、文法カテゴリーと語彙的意味がどのように関わっているのか、文法的意味に対してしばしば対置されつつも実はあまり定義されることのない語彙的意味とは何か、といった文法と語彙の関係を鑑みると、Staltmane による「語彙・文法カテゴリー」という定義は妥協的ではあるが、非常に的を射た定義である。

時代は流れ、Kalnača は機能主義の立場から、ラトヴィア語のアスペクトを動詞形態にとらわれない様々なレベルで表現される「典型的な機能意味論的カテゴリー」(Kalnača 2004, 32) としている。この定義は、PFV・IPFV の対立を持つ文法カテゴリーとしてのアスペクト、つまり動詞の形態 (接頭辞) によるアスペクト表現に焦点を当てたことであまり扱われてこなかった、アスペクトと文脈、アスペクトと動詞の補語、アスペクトと時制の関わり研究の必要性を示唆している。

『標準語文法』や Staltmane 以後、アスペクトは (語彙・) 文法カテゴリーとして、形態論の教科書 (Kalme & Smiltņiece 2001, Nītiņa 2001, Paegle 2003, Kalnača 2011 など) で記述されている。

辞書論では、接頭辞動詞の意味記述においてアスペクトの問題に突き当たる。Staltmane 以降のソ連時代のアスペクト研究の事実上の空白期間を経て、Šmidebergs は辞書論の視点から PFV 性を持つ動詞の意味記述の方法や、言語文化論で批判される PFV の動詞を論考している (Šmidebergs 2000a, Šmidebergs 2008)。

辞書記述には、その語の文法的な情報と語彙的意味が反映される。2000 年代になり、動詞のアスペクト的意味の記述方法が一人の辞書論者によってようやく本格的に議論され始めたことは、ソ連時代のアスペクト研究が Staltmane 以降ほぼ皆無であり、PFV・IPFV それぞれの共通の意味要素を取り出す試みや、PFV・IPFV の意味的対立を模索するアスペクト研究がこれまで十分に行われてこなかったことを示している。

²² このモノグラフ『語形成論 (Vārddarināšana)』は、1970 年代初めに書かれた手書き原稿を 2009 年に出版したものである。

2.3. 辞書記述に見る PFV と IPFV

本節では、辞書記述においてアスペクト対立を成す動詞がどのように説明されているのかを概略する。アスペクトの差異は、体系性は低いものの辞書記述に反映されている。

ロシア語の辞書記述では、完了体か不完了体かどちらかの動詞が見出し語とされ、2つの動詞は互いに指示の関係にある。体の対立をなす2つの動詞の辞書記述に反映される共通の意味要素が語彙的意味であり、その対立が生む意味的差異が体という文法的意味である。ロシア語のアスペクト論で、辞書記述の説明というメタ言語を利用して、完了体動詞の見出し語に対しては別の完了体動詞で、不完了体動詞の見出し語に対しては別の不完了体動詞で説明することで、語彙的意味から文法的意味であるアスペクト的意味を抽出する試みがなされている (Glovinskaja 1982)。

ラトヴィア語では、『標準語辞典』が編纂され始めた1950年代末に、アスペクト対立をなす動詞を同じ見出し語として掲載する可能性を Staltmane が模索しているが (Staltmane 1961, 206-207)、この案は結局実行には移されなかった。今日までラトヴィア語の辞書記述では、アスペクト対立をなす2つの動詞は互いに独立した見出し語として記述され、指示の関係にはない。収録語数や発刊の時期に関わらず、いかなる辞書においても、その動詞が PFV・IPFV のうちどちらに属するのかといった注記は今日まで記されていない。

PFV と IPFV の動詞の辞書記述には統一された記述方法がない。しかし一般に、PFV の動詞の説明には対応の IPFV の動詞が何らかの形で用いられる。接頭辞動詞は基動詞から派生しているため、IPFV の基動詞は意味的にも形態的にも一次的であり、PFV の接頭辞動詞は二次的だからであろう。

本節では、『標準語辞典』において最も一般的な意味に近いと本論文筆者が判断した意味の辞書記述を比較し、PFV の動詞の説明のタイプを大きく3つに分けた。PFV の動詞の説明で用いられている対応の IPFV の動詞には下線を引いた。動詞は IPFV・PFV の順で挙げる。語の説明は『標準語辞典』によるものである。

1) 「終える」型

PFV の動詞は、IPFV の基動詞 + un 「そして」 + PFV の動詞 pabeigt 「終える」 + IPFV の動詞で説明される。これは PFV の動詞の説明を最も簡単にまとめた方法である。IPFV の動詞の説明で用いられる動詞は IPFV の動詞、または本論文 2.6.2. で論じる無アスペクト動詞である。

lasīt と izlasīt 「読む」

lasīt : uztvert, saprast rakstu valodā (tekstu). Uztverot, saprotot rakstu valodā (tekstu), runāt (to klausītājiem).

izlasīt : lasīt un pabeigt lasīt.

lasīt : 書き言葉で (テキストを) 認識し、理解する。書き言葉で (テキストを) 認識し、理解しながら (それを聞き手に) 話す。

izlasīt : 読んで、読み終える。

2) 「結果重視」型

IPFV と PFV の動詞共に、同一の動詞 (下の例では PFV の動詞 iegūt 「得る」) で説明がなされる。PFV の動詞の説明では、IPFV の動詞が因果関係などの付帯状況を示す副分詞の形で用いられ、IPFV の動詞が示す動作の “さらにその先に”、何かを獲得したり、何らかの結果に達成することが示される。IPFV の動詞は PFV の動詞、または無アスペクト動詞で説明される。

pirkt と nopirkt 「買う」

pirkt : Par attiecīgu samaksu, atlīdzību iegūt (mantu, produktu u. tml) savā īpašumā, rīcībā.

nopirkt : Pērkot iegūt.

pirkt : 当該の価格や報酬を払い、自分の財産や配下に (財産、商品などを) 得る。

nopirkt : 買うことで得る。

3) 「接頭辞の有無」型

説明で用いる動詞の接頭辞の有無とそのアスペクト対立により、2つの動詞のアスペクト対立が示される。下の例では、アスペクト対立を持たない動詞 panākt 「実現させる」が2つの動詞の説明に共通して用いられているが、アスペクト対立を成す gūt と iegūt 「得る」によりアスペクト対立が示されている。

veidot と izveidot 「作る」

veidot : ar mērķtiecīgu darbību panākt, ka (piemēram, priekšmets) gūst vēlamo veidu, formu, atbilst noteiktām prasībām.

izveidot : ar mērķtiecīgu darbību panākt, ka (piemēram, priekšmets) iegūst vēlamo veidu, formu, atbilst noteiktām prasībām.

veidot : 目的を持った行為により、(例えばものが) 望ましい姿や形を獲得し (IPFV)、一定の要求に適うようにさせる。

izveidot : 目的を持った行為により、(例えばものが) 望ましい姿や形を獲得し (PFV)、一定の要求に適うようにさせる。

この veidot と izveidot 「作る」は、アスペクト対立をなす他の動詞の説明でも用いられている。

dibināt と nodibināt 「設立する、創設する」

dibināt : radīt, veidot (piemēram, organizāciju, iestādi, pilsētu), veicot noteiktus organizatoriskus pasākumus.

nodibināt : izveidot (piemēram, organizāciju, iestādi, pilsētu), veicot noteiktus organizatoriskus pasākumus.

dibināt : 一定の組織的手順を行い、(例えば組織や機関、町を) 創る、作る (IPFV)。

nodibināt : 一定の組織的手順を行い、(例えば組織や機関、町を) 作る (PFV)。

demolēt と izdemolēt 「破壊する」の説明でも同様に、説明に用いられる動詞のアスペクト対立が、説明される動詞のアスペクト対立を示している。

demolēt と izdemolet 「破壊する」

demolēt : postīt, ārdīt, graut (parasti par cilvēkiem)

izdemolet : izpostīt, izārdīt, sagraut (daudz vai visu kādā telpā, ēkā)

demolēt : 破壊する (IPFV)、引き裂く (IPFV)、粉砕する (IPFV) (ふつう人々について)

izdemolet : 破壊する (PFV)、引き裂く (PFV)、粉砕する (PFV) (たくさん、もしくは空間や建物内のものすべて)

アスペクト対立を示す接頭辞の有無により、語彙的意味に若干の差異が生じることがある。ここでは PFV の動詞 izdemolet に、動作の客体の量の多さや、客体すべてに及ぶという補足的な説明がある。しかしそのような意味も広く PFV のアスペクトの特徴として一般に捉えられる。実際にこれらの動詞は形態的対立をなし、動詞により程度の差こそあるもののアスペクト対立以外の語彙的意味が“ほぼ”一致しており²³、3) の「接頭辞の有無」型の辞書記述により、アスペクト対立をなす2つの動詞と見なされる。

このように、ラトヴィア語の辞書記述においては PFV・IPFV という注記はない。また、ロシア語の辞書記述のように、PFV・IPFV の動詞が同じ見出し語 (=同じ語彙の異なる語形) として掲載されることはなく、アスペクト対立を成す一方の動詞がもう一方の動詞に見出し語として指示されることもない。それでも辞書記述においては、対立するアスペクトの意味が1) から3) のように何らかの形で反映されている。

2.4. 本章で考察するアスペクトの問題

これまでの先行研究で十分に上げられなかったが、本章でアスペクトを概略していく上で考慮に入れる2つの問題を挙げる。

²³ スラヴ語学でも、動詞を単に完了体化する接頭辞は、実際には本来の空間的意味を残したり、語彙的意味に若干の違いを生じさせることがある。この点で、接頭辞法で形成されたアスペクト対立は、接尾辞法で形成されたアスペクト対立と比べて文法度が低いとされる。

第1の問題はPFVとIPFVの意味的対立である。『標準語文法』やStaltmaneのような伝統的な文法記述では、アスペクトペアの対立は接頭辞の有無という形態的対立を中心として記述がなされてきたが、具体的な用例に対する意味的対立の説明はなされてこなかった。また、PFV・IPFV自体の対立が常に明確に表れるわけではなく、どちらのアスペクトの動詞を使ってもよいという場合があるとされる(Staltmane 1958d, 192)ものの、先行研究では意味的対立の中和についての記述はなく、どのような場面においてその対立が中和されるのか、つまり対立が明確でなくなるのかといった考察はなされていない。

これは第2の問題であるアスペクト対立に中立の動詞にも関わっている。アスペクトは対立を成すものであるという解釈をもとに行われてきた従来のアスペクトの記述では、アスペクトに中立な動詞は明らかに周辺的な現象であるため、あまり扱われてこなかった。Kalnačaは、アスペクトに中立な動詞は文脈によりアスペクト対立を表現すると指摘しているが、具体的には動詞とその直接補語の關係にしか着目していない(Kalnača 1998, Kalnača 2004)。しかし本論文2.5.3で論じるように、時間補語やタクシスといった統語的現象にもアスペクト対立が影響を与えることは、これまでの先行研究や記述では検討されていない。広く「文脈」に含まれるこれらの現象が、アスペクトに中立な動詞がPFV・IPFVどちらかのアスペクトを特定する手がかりになりうることは指摘されていない。

PFV・IPFVの意味対立と、アスペクト論では周辺に位置してきたアスペクト的に中立な動詞の扱いを再考することで、アスペクトのカテゴリー全体を捉え直すだけでなく、言語文化論で批判される余剰な接頭辞付加を従来とは異なる解釈で捉えることが可能になると考えられる。よってこの章での考察の結果は、次章の3.5.4で論じる借用語の動詞のPFV化の接頭辞付加の解釈にも応用される。

なお、以降の本論文では、アスペクト対立を成すPFV・IPFVのアスペクトを必要に応じて対立アスペクトと呼ぶことにする。個別的なアスペクトの意味(増大、縮減、限定、過度、開始など)は、2.1の最後に述べたアクツィオンスアルトに一般的に分類される。しかしアクツィオンスアルトという用語はラトヴィア語の伝統的な記述ではあまり用いられない上、アスペクトとアクツィオンスアルトの境界が明確でないことから、個別的なアスペクトの意味は「〇〇アスペクト」と呼び、アクツィオンスアルトという用語は今後特に用いない。これらの個別的なアスペクトは、動作の時間や質が限定されていることから意味的にはPFVのアスペクトに分類できるが、アスペクト対立をなさない点で対立アスペクトではない。

2.5. 対立アスペクト

ラトヴィア語の一部の動詞には、動詞の接頭辞の有無によるPFV・IPFVのアスペクトの対立(*pretstatījums, opozīcija*)、もしくは相関(*korelācija*)、またはペア(*pāris*)がある。

PFVは一般に「過程において限界のある動作」や「動作の開始や終了の時点、ある時間

において完了したと認識される動作」を示す。それに対し IPFV は「動作の開始や終了時点に関係せず、継続中の動作、もしくは恒常的な状態」を示す（『標準語文法』1959, 566）。

本節では、対立アスペクトを形態的対立と意味的対立に分けて考察を行う。形態的対立、ならびに意味的対立を成す2つの動詞が PFV・IPFV のアスペクトペアである。

2.5.1. PFV と IPFV の形態的対立

形態的対立は2つのタイプがあるが、どちらも接頭辞の有無が関係している。

1つ目のタイプは、形式的意味の接頭辞が付加された動詞と基動詞である²⁴。例えば *nopirkt* / *pirkt* 「買う」や *uzrakstīt* / *rakstīt* 「書く」の対立がある。この場合の接頭辞 *no-* や *uz-* は、基動詞を PFV 化する形式的意味の接頭辞とされる。

	PFV	IPFV
「買う」	<i>nopirkt</i>	<i>pirkt</i>
「書く」	<i>uzrakstīt</i>	<i>rakstīt</i>

例文 2-1 では *kad* (英語の *when* に相当) 節において、他の人達の「買う」動作は IPFV 動詞で後景的に示され、進行中の動作として捉えられる。主節における「彼」の「買う」動作は PFV 動詞で前景的に示され、買う行為が一まとまりの動作として捉えられる。「書く」の対立が見られる例文 2-2 では、IPFV 動詞が書くプロセスを示し、PFV 動詞はそのプロセスが終わったことを示す。

例文 2-1 (作例)

Kad citi pirka grāmatas, viņš nopirka žurnālu.
 時 他の人-複 買う-過3 本-複対 彼 買う-過3 雑誌-対
 他の人達が本を買っていた時、彼は雑誌を買った。

例文 2-2 (AU. 12.06.2010)

(..) *sēdēju pie datora* (..) *un rakstīju maģistra darbu. Uzrakstīju!*
 座っている-過1単 元で パソコン そして 書く-過1単 修士-属 作品-対 書く-過1単
 私はパソコンに向かって、修士論文を書いていた。書き終えた！

2つ目のタイプは、空間的意味の接頭辞が付加された PFV の動詞と、IPFV の基動詞+接頭辞の空間的意味と同じ副詞²⁵による分析的表現の対立である。

²⁴ 正確なデータは示されていないが、Staltmane によれば、ラトヴィア語の基動詞のうち約半分がこの形式的接頭辞によるアスペクト対立をなすという (Staltmane 1958d, 95)。

²⁵ 空間的意味の接頭辞に対応する副詞は、文法書に挙げられている (『標準語文法』1959, 571 など)。

基動詞		PFV	IPFV
vērties (蝶番に填まっているものが) 動く	「開く」	atvērties	vērties vaļā
	「閉じる」	aizvērties	vērties ciet
iet (歩いて) 行く	「出る」	iziet	iet ārā
	「入る」	ieiet	iet iekšā

例文 2-3 では基動詞 vērties 「(蝶番に填まっているものが) 動く」から派生した PFV 動詞の atvērties 「開く」、aizvērties 「閉まる」が、例文 2-4 では IPFV の分析的表現 vērties vaļā 「開く」、vērties ciet 「閉じる」が用いられている。副詞 vaļā 「開いて」と ciet 「閉じて」は PFV 動詞の接頭辞 at- 「開」と aiz- 「閉」の空間的意味と同一の意味である。例文 2-3 では、開き、閉じたという事象が点的に示されている。それに対し例文 2-4 では、広い時間幅で数回の動作が行われていたことが示されている。

例文 2-3 (KR. 20.12.2005)

Kādas durvis atvērās un aizvērās. Iestājās miers.
 何らかの ドア 開く-過3 そして 閉じる-過3 訪れる-過3 平穩
 どこかのドアが開き、閉まった。平穩が訪れた。

例文 2-4 (NRA. 17.05.2003)

(..) tās pašas no sevis nemitīgi vērās vaļā vai ciet, (..) tās nebija
 それ自身 から 自分 絶えず 開く-過3 開いて または 閉じて それ-対 否-be-過3
 iespējams atvērt.
 可能である 閉じる
 それ [ドア] はひとりでのに絶えず開いたり閉じたりして、ドアを開けることができなかった。

例文 2-5 では、基動詞 iet 「行く」に空間的意味の接頭辞 iz- 「外」と ie- 「中」が付加された PFV 動詞 iziet 「出る」と ieiet 「入る」が用いられている。それに対し例文 2-6 では、出入りの動作に iet iekšā と iet ārā という IPFV の分析的表現がなされている。ここでの副詞 iekšā 「中に」と ārā 「外に」は、PFV 動詞の接頭辞 ie- 「中」と iz- 「外」の空間的意味と同一である。例文 2-6 の動作の主体は複数であり、ドアの開閉についても、例文 2-3 と例文 2-4 で扱った動詞 vērties 「ドアが開閉する」に反復の接尾辞²⁶-inā が付加され、全体としてひとまとまりに捉えにくい状況を描写している。

²⁶ ラトヴィア語には、反復を示す接尾辞が存在する。元の動詞と「一回・多回」の意味対立をもたらすが、この対立もより抽象的な PFV・IPFV の対立の中にそれぞれ組み込まれる。反復を示す接尾辞は移動や物理的動作を示す動詞に付加されることが多い。

反復の接尾辞には -ā-, -ī-, -inā-, -o-, -ē-, -alā-, -uļā-, -avā-, -alē-, -elē-, -ulē-, -uļo-, -avo- などがある。反復の接尾辞の付加は、基動詞の語幹の母音交替、子音交替、接中辞付加を引き起こすことがある。vērties から派生した virināties では母音交替 (ē-i) が起こっている。

多くの接尾辞は反復の他にも様々な意味を持っている。例えば接尾辞-inā は sitināt 「打つ (多回)」 (sist 「打つ」) のような多回の他にも、klupināt 「つまづかせる」 (klupt 「つまづく」) のような使役を示す。

例文 2-5 (D. 27.05.2000)

Izgāju no mājas Kemerovā, iegāju mūzikas veikalā, kas atradās turpat blakus.
 出る-過1単 から 家 ケメロヴォ-位 入る-過1単 音楽-属 店-位 開代 ある-過3 すぐ 近くに
 私はケメロヴォの家を出て、すぐ近くにあった楽器屋に入った。

例文 2-6 (G.)

Nerimtīgi virinājās plašās durvis, cilvēki gāja iekšā un ārā.
 絶えず 開閉される-過3 幅広の ドア 人-複 行く-過3 中に そして 外に
 幅広のドアは絶えず開閉され、人々が出入りをしていた。

移動や物理的動作を示す動詞は「中に入る」、「外に出る」、「後ろに置く」だけでなく、「喫茶店に入る」、「部屋から出る」、「棚の後ろに置く」のように、具体的な空間が示されることが多い。PFV の場合は接頭辞動詞＋名詞句・前置詞句になり、IPFV の場合は無接頭辞動詞＋接頭辞の空間的意味に対応する副詞句・前置詞句で表される。この場合、接頭辞の示す空間的意味に対応する副詞の使用は不可能、もしくは不必要になる。

	PFV	IPFV
「喫茶店に入る」	ieiet kafejnīcā	iet kafejnīcā iekšā
「部屋から出る」	iziet no istabas	iet (ārā) no istabas
「棚の後ろに何かを置く」	aizlikt ko aiz skapja	likt ko aiz skapja

「喫茶店に入る」の場合、「中」を示す接頭辞 *ie-* が付加された動詞 *ieiet* 「入る」は、位格の *kafejnīcā* 「喫茶店に」を要求し、どちらのアスペクトにおいてもそれは変わらない。「部屋から出る」の接頭辞 *iz-* 「外」に対応する副詞 *ārā* 「外へ」の空間的意味は、起点を示す前置詞句 *no istabas* 「部屋から」によっても示されるため、副詞 *ārā* の使用は選択的となる。「棚の後ろに（何かを）置く」の接頭辞 *aiz-* の空間的意味「後ろ」に対応する副詞はそもそも存在せず²⁷、空間的意味「後ろ」は副詞ではなく前置詞句により示さざるを得ない。

『標準語文法』や *Staltmane* の記述では、形式的意味の接頭辞によるアスペクト対立と空間的意味の接頭辞によるアスペクト対立はまとめて論じられてきた。アスペクト対立の形態的対立の手段である形式的意味の接頭辞と空間的意味の接頭辞は、本論文の問題意識に関連しているが、副詞を使った IPFV の分析的表現には不明確な点が多い²⁸。よって、次節では形式的意味の接頭辞に関わる対立を例に、PFV・IPFV の意味的対立を見る。

²⁷ 対応の副詞を持たない接頭辞の空間的意味には、接頭辞 *iz-* の「通」と接頭辞 *pa-* の「下」がある（『標準語文法』1959, 572）。

²⁸ 副詞は PFV の接頭辞動詞と共に冗語的に用いられることもあり、副詞自体がアスペクト対立を示すわけではない（*Holvoet* 2001, 134）。IPFV の分析的表現における副詞の使用は表現的で口語で用いられることが多い。*Staltmane* は、IPFV の動詞が動作を眼前展開的に示すことから、IPFV の分析的表現における副詞の使用が発話をより鮮やかに力強くする、という文体的ニュアンスを指摘している（*Staltmane* 1958d, 187-189）。

2.5.2. PFV と IPFV の意味的対立

形態的対立が接頭辞の有無という明快な対立であるのに対して、意味対立はより複雑な様相を見せる。ここでは、先行研究や記述においてそれぞれの対立アスペクトにどのような特徴づけがなされているかを概略し、PFV・IPFV の意味的対立を考察する。

PFV 性の特徴には、限界性、瞬間性、開始、限定、開始点、『標準語文法』では終了点や一定の時間における動作の集中性、結果性が挙げられている (Staltmane 1958d, 191, 296, 『標準語文法』1959, 566)。ロシア語のアスペクト論においては、PFV の意味要素の一つに「出来事 (性)」があるが、ラトヴィア語でも特に深い定義はなされないまま「出来事」という語で PFV のアスペクトが特徴づけられている (Hauzenberga-Šturma 1979, Kalnača 2004, 30)。

IPFV 性の特徴には、進行、反復、状態が挙げられる (『標準語文法』1959, 566)。

本論文では、PFV・IPFV の意味的対立として「非進行・進行」、「具体・一般」、「テーマ・レーマ」、「結果達成・結果達成への過程」を挙げる。

「非進行・進行」

アスペクト論では、動詞が進行中の動作を示すかどうかを判断するための古典的質問「今何をしているの？」がある。この質問に答えることができる動詞が IPFV の動詞とされる。ラトヴィア語には英語の進行形のように、ある時制において進行中の動作を示す特別な手段がなく、IPFV の動詞で進行中の動作を言い表す。例文 2-7 では、この質問の答えとして IPFV の動詞 *taisīt* 「作る」が用いられている。PFV の動詞 *uztaisīt* を用いることはできない。

例文 2-7 (D. 20.08.2011)

- Ko tu tur dari?
何-対 君 そこで する-現2単
- Ēst taisū.
食べる 作る-現1単
- そこで何してるの？
- 食事を作っているよ。

進行はその意味から、長い時間幅よりも限られたある時間幅の中で進行する動作を示しやすい。例えば、上の例文 2-7 では発話時点で何をしているかが話題になっている。また「昨日あなたは何をしていましたか？」という質問と、「私が電話をしたとき、あなたは何をしていましたか？」という質問を比べると、「昨日」と「私が電話をしたとき」では時間幅が異なる。進行中の動作が話題となりやすいのは後者の場合である。

しかし動作が習慣的であれば、動作の進行の有無の表示自体が不必要な場合もある。この場合「非進行・進行」という意味対立は中和され、「非進行・進行」の意味対立ではアスペクト対立を説明できなくなる。

PFV・IPFV の動詞 *uzrakstīt* と *rakstīt* 「書く」を見る。例文 2-8 では、IPFV の動詞が詩人たちについてのパロディーを書く動作を習慣として示している。IPFV の動詞が示す動作は

「昔 (savā laikā)」という漠然とした時間幅で行われており、動作が進行していたわけではない。

例文 2-8 (JA. 29.08.2003)

Savā laikā es rakstīju ļoti daudz parodiju par dzejniekiem (..).

昔 私 書く-過1単 とても 多くの パロディー-複 ついて 詩人-複

昔私は詩人たちについてとても多くのパロディーを書いた。

一方で例文 2-9 では「学校時代 (skolas laikā)」という時間幅の中で習慣となっていた詩を書く行為が PFV の動詞で示されている。

例文 2-9 (DR. 06.11.2006)

Skolas laikā uzrakstīju ļoti daudz dzejoļu. Tādus bērnišķīgus, bet arī

学校-属 時-位 書く-過1単 とても 多くの 詩-複 このように 子供らしい しかし も

panopietnus.

結構真面目な

私は学校時代たくさんの詩を書いた。子供っぽいものもあれば、結構真面目なものも。

例文 2-8 と例文 2-9 では、それぞれ「昔 (savā laikā)」「学校時代 (skolas laikā)」と時間幅は異なるものの、たくさんのパロディーや詩を書く習慣は PFV・IPFV の動詞で言い表されている。この場合「非進行・進行」ではアスペクト対立を説明できないことになり、話者が自身を動作の外に置くか、中に置くかという動作の見方の違いという、本章の最初で述べた基本的な PFV・IPFV の対立が想起される。

進行中の動作が示さない、もしくは示しにくいのは、進行中の動作ではなく習慣が示される現在時制においても言える。このような広い現在時制で IPFV の動詞が進行の意味と相容れなくなり、「非進行・進行」の意味対立が中和されることで、その代わりに前面に出てくる意味対立が「具体・一般」である。

「具体・一般」

「非進行・進行」の対立が、Comrie による「状況の内的時間構造」というアスペクトの定義により近いのに対し、動作の「具体・一般」はアスペクトには直接関係のない意味対立にすら思える。「具体・一般」の意味対立は「定・不定」の意味カテゴリーで扱われることが多い。しかし、この意味対立がアスペクトの対立にも関与することは一般的な見解で、ラトヴィア語のアスペクト論でも Kalnača がごく簡単に触れている (Kalnača 2004, 19)。

動詞の補語に具体的数量を伴う場合は PFV の動詞、数量が漠然と示されている場合は IPFV の動詞が用いられることが多い。

例文 2-10 と例文 2-11 では、「書く」動作が IPFV と PFV の動詞で示されている。

例文 2-10 (ZL. 27.05.2006)

Toreiz jau katru dienu rakstīju pa dzejolim.
 当時 助 毎 日 書く-過1単 ずつ 詩

当時〔戦時中〕はもう毎日詩を1つずつ書いていた。

例文 2-11 (LI. 20.11.2010)

Vīrs uz mūsu kāzu 10 gadu jubileju atradās slimnīcā, un, viņu gaidot,
 夫 向けて 私達-属 結婚式-複属 年-複属 記念日 いる-過3 病院-位 そして 彼-対 待つ-副
 katru dienu uzrakstīju pa dzejolītim – pavisam desmit.
 毎 日 書く-過1単 ずつ 詩-指 全部で 10

夫は私たちの結婚 10 周年の記念日に病院にいた。そして彼を待ちながら、私は毎日1つずつ、全部で 10 の詩を書いた。

過去時制の両例文の katru dienu 「毎日」は例文 2-10 では戦時中、例文 2-11 では夫が入院していた日々を示しており、時間幅は異なる。そこで毎日行われていた、1日に詩を1つずつ (pa dzejolim とその指小形 pa dzejolītim) 書く動作はどちらのアスペクトの動詞でも示されているが、例文 2-11 では書いた詩の数の詩が総計されており、具体的な数量を伴っている。

現在時制の例文 2-12 も「具体・一般」の対立によって説明がなされる。IPFV の動詞 ēst 「食べる」が一般にケーキ(複数)を食べる行為(例文では否定形)であるのに対し、PFV の動詞 apēst 「食べる」はケーキの量(1,2個)が特定され、より具体的となっている。

例文 2-12 (D. 31.10.2009)

Varētu teikt, ka neēdu kūciņas, bet tad es melotu – gadā vienu,
 できる-願 言う 従 否-食べる-現1単 ケーキ-複対 しかし では 私 嘘をつく-願 年位 1
 varbūt divas kūciņas apēdu.
 多分 2 ケーキ-複対 食べる-現1単

ケーキは食べないと言えるけど、そう言うと嘘になるだろう。一年に1個、もしかしたら2個のケーキを食べる。

次の例文 2-13 のように与格の間接補語をとる動詞の場合にも、文脈により「具体・一般」の対立が示される。ここでは PFV の動詞 piezvanīt 「電話する」とその IPFV の動詞 zvanīt は、電話をかける「母の日」と「他の日(複数)」に応じて用いられている。

例文 2-13 (D. 28.02.2004)

Vienīgi Mātes dienā es piezvanu mammai. Bet es zvanu mammai arī
 ただし 母-属 日-位 私 電話する-現1単 ママ-与 しかし 私 電話する-現1単 ママ-与 も
 citās dienās.
 他の 日-複位

でも母の日にはママに電話をする。けど他の日にもママに電話をする。

Maslov は「具体・一般」の意味対立を、「他の意味対立やアスペクト対立と比べ、より主

観的に表される」としている (Maslov 1978, 24)。「具体・一般」の意味対立が主観的であるという見解に似た意見として、「テーマ・レーマ」の問題がある。例えばロシア語における体の使い分けは外国人学習者にとって難しい文法事項であり、動詞を使う際には文法カテゴリとして必ずどちらかの体を選択しなければならない。学習者はとかく文法的誤りを犯さないことを意識し、そもそも「正しい」も「正しくない」もない状況がありうることを忘れがちである。興味深い点として、Karavanov はロシア語の体の用法の教科書において、どちらの体の選択も可能な体の用法に「テーマ・レーマ」の対立を挙げている。情報を新しいものとするか、既知のものとするかは完全に話者の選択であるとし、完了体 (レーマを表示) を使うか不完了体 (テーマを表示) を使うかの選択は主観的なものであるとしている (Karavanov 2005, 5-6)。

事象自体にテーマ・レーマがないように、「具体・一般」の意味対立でも、事象が具体的か一般的か固有に決まっているわけではない。そして「具体・一般」の基準は純粹に意味的なものであり、厳密な区別は非常に難しい。

例文 2-14 (G)

Ar malāriju katru gadu saslimst ap 200-300 miljoni. No tiem katru gadu
 で マラリア 毎 年 病気になる-現3 約 100万-複 から 彼ら 毎 年
 nomirst aptuveni 1-1,5 miljoni. Galvenokārt mirst bērni (90%), kas slimo ar
 死ぬ-現3 およそ 100万-複 主に 死ぬ-現3 子供-複 関代 病気である-現3 で
 tropisko malāriju un dzīvo Āfrikā uz dienvidiem no Sahāras tuksneša.
 熱帯の マラリア そして 生きる-現3 アフリカ-位 へ 南 から サハラ-属 砂漠
 毎年2-3億人がマラリアにかかる。そのうち毎年死亡するのは、約100万人から150万人である。主に死亡するのは、熱帯性マラリアにかかっており、サハラ砂漠以南のアフリカに住む子供(90%)である。

3つの文からなる例文 2-14 では、毎年のマラリアの発症者数、そのうちの死亡者数、主な割合を占める死亡者の特徴が述べられている。ここでは死亡者数と死亡者の特徴を述べる最後の2文に、それぞれ PFV・IPFV の動詞 nomirt と mirt 「死ぬ」が用いられている。「死亡者数」と「9割の死亡者の特徴」のどちらが具体的で一般的であるのかの判断は、例文 2-12 (ケーキをそもそも食べるか、食べるならいくつ食べるか) や例文 2-13 (母親に母の日に電話をするか、他の日にも電話をするか) に比べて不明確である。

「具体・一般」の意味対立の観点から例文 2-14 を見ると、PFV の動詞で示される死亡者数が具体的な事象、IPFV の動詞で示される主な発症者が一般的な事象ということになる。しかしテキストにおいては、一般的な事象を述べた後に具体的な事象を述べることも可能であり、IPFV の動詞を用いて死亡者数を一般的に述べ、PFV の動詞を用いて死亡者数の特徴を具体的に述べることもできる。このように「具体・一般」の意味対立は事象に本来的に固有であるというよりも、話者が自身の主観的判断により客観的事実を具体的・一般的に述べて具体化・一般化をする際に生まれる意味対立であり、その際に動詞の対立アスペクトが使い分けられていると言える。

一方で例文 2-14 の PFV・IPFV の動詞は「具体・一般」の意味対立ではなく、「テーマ・レーマ」の対立によっても解釈できると筆者は考える。マラリアの発症者数を受けて、死亡数が初めて言及される。ここで死亡者がいること自体が初めて言及され、PFV の動詞が示す「死亡者」がレーマとなっている。その直後、死亡者の存在自体はテーマとして既知の情報になり、死亡者の特徴が示されていると考えられる。

「テーマ・レーマ」

アスペクト対立が「テーマ・レーマ」といった事象の焦点化にも関与する例として、以下の例文 2-15 から例文 2-18 がある。ここでは PFV の動詞により動作が起きたことがまず示され（レーマ）、IPFV の動詞を用いることによって、その起きた動作（この時点ですでにテーマ）の状況に焦点が当たっている。

例文 2-15 では、PFV の動詞 *atnākt* で友人が名前の日のお祝いに「来る」ことが示されている。そして「招待されずに」という動作の付帯状況に焦点が置かれると、IPFV の動詞 *nākt* が用いられている。

例文 2-15 (VAVZ. 03.02.2000)

Vārdadienā atnāk draugi, un visi nāk neaicināti.
 名前の日-位 来る-現3 友人-複 そして 皆 来る-現3 否-招待する-受過
 名前の日には友人たちがやってくる。そしてみんな招待されずにやってくる。

例文 2-16 では、本を「読んだ」ことと、何語で「読んだ」のかが述べられている。「読んだ」ことは PFV の動詞 *izlasīt* でレーマとして導入されるが、「何語で」という付帯状況が話題になると、本を読んだこと自体はテーマとなり、IPFV の動詞 *lasīt* が用いられている。

例文 2-16 (S. 11.2008)

Es izlasīju viņa pēdējo grāmatu „No dziļumiem”, lasīju krievu valodā.
 私 読む-過1単 彼-属 最後の 本-対 から 深み-複 読む-過1単 ロシア人-複属 言語-位
 私は彼の最後の本「獄中記」を読んだ。ロシア語で読んだ。

例文 2-17 では家を「買った」こと、そしてどのように「買った」かが述べられている。PFV の動詞 *nopirkt* で家を買ったことがまず述べられ、IPFV の動詞 *pirkt* でそれをローンで買ったことが述べられている。

例文 2-17 (VZŽ. 13.03.2009)

Tad to arī Leontijs nopirka. Tiesa, viņš to pirka kredītā, māja maksāja ap 2000 latu.
 そして それ-対 も 買う-過3 確かに 彼 それ-対 買う-過 ローン-位 家
 値段がする-過3 約 ラツツ-複属
 そして Leontijs もそれ [家] を買った。ただ、彼はそれをローンで買った。家は約 2000 ラツツ [通貨単位]

の値段だった。

例文 2-18 では、亡命者が亡命先に「持って行った」品々が述べられている。PFV の動詞 *paņemt* が色々なものを持って行ったことを示し、具体的にどのようなものを持って行ったのかに焦点が置かれると IPFV の動詞 *ņemt* が用いられる。

例文 2-18 (LV. 19.06.2003)

Zīmīgas un interesantas ir mantas, ko bēgļi paņēma līdz, jo bieži viņi
 意義がある そして面白い be-現 もの-複 関代 難民-複 取る-過3 持って なぜならよく 彼らは
ņēma līdz ne tikai sadzīvei un eksistencei vajadzīgos priekšmetus, bet arī
 取る-過3 持って 否 だけ 生活-与 そして 生命-与 必要な もの-複対 しかし も
 relikvijas un latviskus priekšmetus (..).
 聖遺物-複対 そして ラトヴィア的な もの-複対

意味深く、面白いのは、亡命者らが [亡命先に] 持って行ったものである。彼らはしばしば、生きるために必要なものだけでなく、聖遺物やラトヴィア的なものも持って行ったからである。

特定の文脈においては PFV の動詞が結果達成を表し、IPFV の動詞が結果達成への過程を表す。この「結果達成・結果達成への過程」の意味対立は、PFV と IPFV の動詞が近い文脈で用いられている際に顕在化する。これらの動詞は、形式的にはアスペクト対立を成しているように見えても、別の語彙的意味を持つ動詞 (*nokārtot*「合格する」と *kārtot*「受験する」、*sameklēt*「見つける」と *meklēt*「探す」など) と区別する必要がある。

例文 2-19 では、IPFV の動詞 *glābt*「救う」は、語順の観点から救助に当たった人の人数が話題となっている。救助したこと自体は PFV の動詞 *izglābt* で示されている。

例文 2-19 (RA. 14.09.2006)

Zirgu glāba astoņi cilvēki. Un izglāba.
 馬-対 救う-過3 8 人-複 そして 救う-過3
 馬には 8 人が救助に当たった。そして救助した。

例文 2-20 では、死につつある様子が IPFV の動詞 *mirt*「死ぬ」で示されている。しかし、結局死ななかつたことは、PFV の動詞 *nomirt* の否定形で示されている。

例文 2-20 (CB.)

Miris, miris, bet nenomiris.
 死ぬ-能過 死ぬ-能過 しかし 否-死ぬ-能過

[彼は] 長らく死の床にあったが、死ななかつた。

これらの動詞は、IPFV の動詞が反復されたり、PFV の動詞が動作の結果を示す接続詞 *kamēr*「…する間」や *līdz*「…するまで」を伴う構文において、「結果達成・結果達成への過程」が強調される。特に IPFV の動詞が反復されると、結果達成への過程が強調される。

例文 2-21 でも IPFV の *ķepuroties* 「(困難な状況などから) 抜け出そうとする」とその PFV 動詞 *izķepuroties* 「抜け出す」が用いられ、「結果達成・結果達成への過程」を示している。例文 2-22 の PFV 動詞 *iedarbināt* 「駆動させる」とその IPFV 動詞 *darbināt* も同様である。

例文 2-21 (BD. 25.08.2009)

Šādās situācijās parasti 85 procenti sastingst un nezina ko darīt,
 このような 状況-複位 普通 パーセント-複 固まる-現 そして 否-知る-現 何-対 する
 bet 15 procenti ķepurojas, kamēr izķepurojas.
 しかし パーセント-複 もがく-現3 する間 脱却する-現3

このような状況では普通 85%の人が固まってしまい、何をすべきかわからないままだが、15%の人は状況から脱却するまでもがく。

例文 2-22 (K. 08.2009)

Iznācu no viesnīcas, centos iedarbināt moci, darbinu,
 出て来る-過1単 から ホテル 努力する-過1単 起動させる バイク-対 起動させる-現1単
darbinu, bet nekādas reakcijas.
 起動させる-現1単 しかし いかなる 反応-属

ホテルから出て来て、バイクのエンジンをかけようとしたが、何度かけようとしても何の反応もなかった。

「結果達成・結果達成への過程」という意味対立は、接頭辞が空間的意味を示す動詞と基動詞についても言える。例文 2-23 では基動詞には接頭辞 *ie-* 「中」と同じ意味を持つ副詞 *iekšā* は用いられていないが、接頭辞動詞が中へ走りこむという結果達成を、基動詞がその過程を示している。

例文 2-23 (LR. 31.03.2011)

Vairāk vai mazāk mēs tomēr skrienam, skrienam, skrienam un tomēr
 より多く または より少なく 私達 やはり 走る-現1複 走る-現1複 走る-現1複 そして やはり
ieskrienam sienā.
 走りこむ-現1複 壁-位

多かれ少なかれ、私達は走り、走り、走り、やはり壁に入り込んでしまう [=壁に突き当たってしまう]。

念願の役を2回オファーされつつも引き受けるのを断念し、3回目にして承諾した女優についての例文 2-24 では、最初の2回の IPFV の動詞 *nāca* 「来た」では女優の元には「完全には来ていない」が、PFV の動詞 *atnāca* では「完全に来て」いる。

例文 2-24 (D. 12.02.2000)

Loma nāca, nāca un atnāca.
 役 来る-過3 来る-過3 そして 来る-過3

[女優が念願の役を手に入れるまで] 役はめぐりにめぐってやってきた。

例文 2-21 の *ķepuroties* 「(困難な状況などから) 抜け出そうとする」のような、動詞の語

彙的意味に結果達成への過程が内在している動詞でなくとも、PFV・IPFVの動詞がこのような構文で用いられることで、IPFVの動詞において結果達成への過程が顕在化することもある。例文 2-25 の IPFV の動詞 *tulkot* 「訳す」「解釈する」のような多義性のある動詞では、その意味に応じた PFV の動詞 *pārtulkot* 「訳す」と *iztulkot* 「解釈する」が結果達成を、IPFV の動詞が結果達成への過程を示す。

例文 2-25 (G.)

Tulkotāji tulkot, tulkot, kamēr pārtulkot. Juristi tulkot, tulkot, kamēr iztulkot.
 翻訳家-複 訳す-現3 訳す-現3 する間 訳す-現3 法律家-複 説明する-現3 説明する-現3 する間
 解釈する-現3

翻訳家は、翻訳し終わるまでずっと翻訳をする。法律家は、解釈し終わるまでずっと解釈する。

例文 2-26 では、IPFV の基動詞 *dot* 「与える」とその PFV の動詞 *iedot* が用いられている。基動詞の示す動作は相手が受け取らなかったために実現せず、PFV の動詞では動作が実現している。

例文 2-26 (D.26.07.2007)

Nākamajā dienā es viņam devu santīmus, taču viņš neņēma. Iedevu vismaz ābolu. Viņš uzreiz iekodās un slavēja rudens ražu.
 次の 日-位 私 彼-与 与える-過1単 サンチーム-複対 しかし 彼 否-取る-過3 与える-過1単
 せめて リンゴ-対 彼 すぐに かじりつく-過3 そして ほめる-過3 秋-属 収穫物-対

翌日私は彼に数サンチーム [通貨単位、100 サンチーム=1 ラツツ] をあげようとしたが、彼は受け取らなかった。せめてリンゴをあげた。彼はすぐにかじりつき、この秋の味覚をほめた。

「結果達成・結果達成への過程」は動詞の語彙的意味に内在するだけでなく、文脈によっても条件づけられる。例文 2-27 では、反復される IPFV の動詞 *pirka* 「買った」は「買おうとしていた」でなく、PFV の動詞 *nopirka* 「買った」は「購入に踏み切った」ではない。ここで PFV の動詞が示す結果達成は「一定の購入数」であり、IPFV の動詞は反復して用いられることで、一定の購入数を達成するまでの過程を描写するために用いられている。

例文 2-27 (D. 20.10.2004)

(..) *pircēji vispirms nespēja pierast vai veselu gadu, bet pēc tam pirka un pirka, līdz nopirka veselu miljonu New Edge dizaina mašīnu(..).*
 買い手-複 まず 否-できる-過3 慣れる ほぼ 丸 年 しかし その後
 買う-過3 そして 買う-過3 まで 買う-過3 丸 100万-対 デザイン-属 車-複

買い手はほぼ丸一年経っても [車に] 慣れることができなかったが、その後購入数は伸びていき、このニューエッジデザインの車の購入台数は 100 万台に達した。

PFV・IPFV の「結果達成・結果達成への過程」は、あくまで特定の構文において顕在化するものである。例文 2-24 と同じインタビュー記事のタイトルである例文 2-28 を見る。

例文 2-28 (D. 12.02.2000)

Loma nāca trīs reizes.
 役 来る-過3 3 回-複対
 役は3回やってきた。

例文 2-24 では、女優が断った2回のオファーがやってきたことを示す IPFV の動詞 *nāca* 「来た」と、女優が承諾した3度目のオファーがやってきたことを示す PFV の動詞 *atnāca* 「来た」が示されていた。例文 2-24 で PFV の動詞が示す状況は、オファーの回数が話題の例文 2-28 では、IPFV の動詞が示す状況に組み込まれている。PFV の動詞が表す結果達成は、結果達成の表示の必要性がない場合には IPFV によって包括される。よって結果達成は PFV が持ちうる意味特徴だが、文脈においては結果達成の有無の表示の必要性自体がなくなることもある。

以上のように IPFV の動詞は進行中の動作を示すが、一般的な事実や習慣を述べる際には「非進行・進行」の意味対立は常に顕在化するわけではない。「具体・一般」の意味対立も、事象に固有のものではなく、あくまで話者が事実を具体化・一般化しているに過ぎない。これは「テーマ・レーマ」にも言える。「結果達成・結果達成への過程」もまた、動詞の語彙的意味に内在していなくても特定の構文で見られるが、常に顕在化するとは限らない。

2.5.3. PFV と IPFV の動詞の統語的特徴

広く“文脈”と見なすことができる統語的現象は、先行研究では十分な指摘がなされてこなかった。PFV・IPFV の動詞が見せる統語的特徴には、時間補語の格や、文レベルで現れる複数の動作の相互の時間関係を示すタクシスがある。

時間補語の格

時間を示す補語は対格と位格で示される。便宜上それぞれを時間対格と時間位格と呼ぶ。

『標準語文法』では、時間補語の格とアスペクト対立の関係は明言はされていない。しかし時間対格と時間位格の項目を見ると、使用されている例文の動詞は、時間位格では PFV の動詞、時間対格では IPFV の動詞になっている(『標準語文法』 1959, 399, 407)。

「二ヶ月」や「一年間」といった数を伴う時間補語の場合、時間対格は“動作の長さ”、つまり動作が続く継続時間を示し、IPFV の動詞と結びつく。一方で時間位格は、“動作の速さ”、つまり動作遂行にかかる所要時間や動作の制限時間を示し、PFV 動詞と結びつく。よって、格の用法と動詞のアスペクト対立が互いに関わっていることになる。

例文 2-29 では、IPFV の動詞 *griezties* 「回る」が時間対格の 365 dienas 「365 日間」と結びつき、地球が 365 日間継続的に回っている様子を示している。それに対し例文 2-30 では、PFV の動詞 *apgriezties* 「回る」は時間位格の 365 dienās 「365 日で」と結びつき、一回りという制限された「回る」動作の所要時間が示されている。

例文 2-29 (TV. 26.11.2005)

(..) zeme griežas ap sauli 365...dienās.
地球 回る-現3 周りを 太陽 日-複対

地球は太陽の周りを 365 日間回っている。

例文 2-30 (G.)

Pāreja uz Gregora kalendāru nav nekāda iegriba – ne jau precīzi 365...dienās
移行 へ グレゴリオ-属 暦 否-be-現3 いかなる 気まぐれ 否 助 正確に 日-複位

Zeme apgriežas ap Sauli.
地球 回る-現3 周りを 太陽

グレゴリオ暦への移行は何の気まぐれでもない。地球は太陽の周りを正確には 365 日では回っていないからである。

教会の建設の期間とその所要時間は、例文 2-31 と例文 2-32 において、時間対格を伴う IPFV の動詞 *celt* 「建てる」と時間位格を伴う PFV の動詞 *uzcelt* で示されている。

例文 2-31 (LL. 27.08.2004)

Baznīcu cēla četrus gadus un celtniecību veikusi SIA "Jēkabpils PMK".
教会-対 建てる-過3 4 年-複対 そして 建設-対 行う-能過 有限会社

教会の建設は 4 年間行われ、建設は有限会社 Jēkabpils PMK が行った。

例文 2-32 (DR. 11.11.2009)

Baznīcu uzcēla trīs...gados, tagad pienācis laiks lielākam remontam (...).
教会-対 建てる-過3 3 年-複位 今 やってくる-能過 時 大きい-比 工事-与

教会の建設は 3 年で行われたが、今、大規模な工事の時がやってきた。

時間位格の示す所要時間の意味は、時間単位の属格 + *laikā* (名詞 *laiks* 「時」の位格) でも表現される²⁹。例文 2-33 では、角が「成長する (IPFV)」期間が時間対格で、角が一定の重さまで「成長する (PFV)」所要期間が、*laikā* を用いた表現で示されている。

例文 2-33 (S. 11.2008)

Briežu bullim ragi aug divus mēnešus un var izaugt līdz pat 20
鹿-複属 雄-与 角-複 育つ-現3 2 月-複対 そして できる-現3 育つ まで さえ

kilogramus smagi. Divu mēnešu laikā!
キログラム-複 重い 2 月-複属 時位

雄鹿の角は 二ヶ月成長し、20 キログラムの重さにまで 成長することができる。 二ヶ月で!

²⁹ 時間位格と *laikā* の類義性は以下の例文で証明される。2 つの文は対話になっている。

(..) 55 kilogrami trijos mēnešos – tā ir nenormālība. (LR. 04.12.2008)

3ヶ月で 55 キロ [の減量] は尋常ではないです。

Jums ir taisnība, trīs mēnešu laikā 55 kilogrami – tas nav normāli. (LR. 04.12.2008)

おっしゃる通り、3 か月で 55 キロ [の減量] は尋常ではないですよ。

タクシス

タクシスは「複数の動作の同時性と複時性³⁰ (先行と後続)」(Bondarko 2007, 235-236) と理解され、複数の動詞の時間関係を示す、文やテキストレベルで示される統語的なアスペクトの表現である。同時性と順次性には完全なものと部分的なものがあるとされるが (Bondarko 2007, 243)、その区別は文脈に依存する。ラトヴィア語の統語論では、完全な同時性の表現には IPFV の動詞の並列が、完全な順次性の表現には PFV の動詞の並列が基本とされる (『標準語文法』1961, 605-613)。

例文 2-34 では、出し物を「聞く」「見る」が IPFV の動詞 klausīties と skatīties で示され、2つの動作は同時性を示している。出し物は耳で聞いて、目で見えるものである。PFV の動詞 noskatīties と noklausīties が並列される例文 2-35 では、出し物を「見る」と国歌を「聞く」ことは別々の行事であり、厳密には同時に起こっていない。

例文 2-34 (BD. 18.05.2007)

Kamēr vieni dziedātāji uzstājās, citi klausījās un skatījās viņu
 する間 ある 歌手-複 演奏する-過3 他の人-複 聞く-過3 そして 見る-過3 彼ら-属
 priekšnesumu.
 出し物-対

ある歌手たちが演奏していた間、他の歌手たちは彼らの出し物を聞いたり、見た。

例文 2-35 (D. 15.09.2000)

(.) olimpīeši noskatījās aborigēnu priekšnesumu un noklausījās visu
 五輪選手-複 NO-見る-過3 アボリジニー-複属 出し物-対 そして NO-聞く-過3 すべての
 valstu himnas.
 国-複属 国歌-複対

五輪選手たちはアボリジニーの出し物を見て、全参加国の国歌を聞いた。

一方で「PFV の動詞の列挙＝順次性のタクシス」や「IPFV の動詞の列挙＝同時性のタクシス」とは単純には言えない場合もある。例文 2-36 では、PFV の動詞の列挙で同時に起こっていた複数の動作をひとまとまりで示している。逆に例文 2-37 では、IPFV の動詞の列挙でも同時に起こらない複数の動作が示され、各動作の過程が注目されている。

例文 2-36 (OZ. 17.01.2006)

Pie bagātīgi klātiem galdiem visi klātesošie noklausījās un noskatījās
 元で 豪華に 盛る-受過 机-複 すべての 出席者-複 NO-聞く-過3 そして NO-見る-過3
 priekšnesumus.
 出し物-複対

豪華に盛られたテーブルに集まり、出席者は皆出し物を聞き、見た。

³⁰ Bondarko は複時性 (raznovremennost') という用語を用いているが、彼の引用部分を含む以降の本論文では、複時性ではなく順次性という用語を用いる。

例文 2-37 (BD. 02.01.2008)

Vakara gaitā sanāksmes dalībnieki klausījās Latvijas himnu, skatījās videofilmu
 晩餐会-属 間-位 会合-属 参加者-複 聞く-過3 ラトヴィア-属 国歌-対 見る-過3 ビデオ-対
 (..) un atcerējās pagātnes notikumus.
 そして 思い出す-過3 過去-属 出来事-複対

晩餐会の間、会合の参加者達はラトヴィアの国歌を聞いたり、ビデオを見て、過去の出来事を振り返った。

順次性のタクシスを表す典型的な文として、ラテン語によるカエサルの言葉「来た、見た、勝った (Veni, vidi, vici)」のラトヴィア語訳である例文 2-38 がある。nākt「来る」とアスペクトペアを形成する PFV の動詞 atnākt、アスペクトペアを持たないものの PFV に意味が近い動詞 ieraudzīt「見る³¹」、そして動詞 uzvarēt「勝つ」が過去形で用いられている。この動詞の基動詞は varēt「できる」で接頭辞 uz-の空間的意味は「上」だが、接頭辞が語彙化して大幅な意味修正を受けた接頭辞動詞であり、アスペクト対立をなさない動詞³²である。しかしこの動詞は文レベルで表れる PFV アスペクトに影響を受け、この文脈では PFV の意味を持つ。

例文 2-38 (D. 13.08.2010)

Atnācu, ieraudzīju un uzvarēju.
 来る-過1単 見る-過1単 そして 勝つ-過1単
 来た、見た、勝った。

順次性のタクシスは、料理のレシピや取扱説明書といったテキストにおいてよく現れる。テキストの構造として、「これをして、それからあれをして…」というように、順次的な一連の動作が描写されるからである。この場合、物理的動作を示す動詞が多く、物理的動作には空間的意味の接頭辞が付加されやすいことから、PFV の接頭辞動詞が多い。

IPFV の動詞を連続で使用しても同時性が認められないこともある。例文 2-39 は国民的合唱曲の「光の城 (Gaismas pils)」の一節である。「来る」「倒れる」「沈む」「消える」という一連の動作は IPFV で表されているが、論理的には順次性が認められる。また「沈む」と「消える」の IPFV の動詞は副詞 ātri「速く、すぐに」を伴っているが、一連の動作の展開はゆっくりと、スローモーションのように引き伸ばされて描写されている。例文 2-39 は歌詞であり、音節数を変えることはできないが、3つの動詞³³がそれぞれ atnāca, nogrima, pazuda のように PFV の動詞であったならば、一連の順次的な動作は「やってきた」「死に倒れた」「沈んだ」「消えた」と点的にイメージされるであろう。

³¹ 動詞 redzēt「見る」と共に知覚動詞であるが、redzētが見えるという状態を示すのに対し、ieraudzītは、見えなかったものが見えるようになる、視界の中に認めることを示す。

³² アスペクト対立をなさない接頭辞動詞は 2.6. で詳しく見る。

³³ krist「倒れる」は nokrist「倒れる」に対する IPFV の動詞だが、名詞を伴う表現 krist nāvē「死に倒れる (=死ぬ)」では慣用的に基動詞のみ用いる。このような定型表現でどちらか一方のアスペクトの動詞を使うものには izdarīt izvēli「選択をする」、izdarīt pašnāvību「自殺をする」などがある。この場合 IPFV の基動詞の darīt「する」は用いない。

例文 2-39 (KOR.)

Vergu valgā tauta nāca,
 奴隷-複属 綱-位 民 来る-過3

Nāvē krita varoņi.
 死-位 落ちる-過3 英雄-複

Ātri grima, ātri zuda
 速く 沈む-過3 速く 消える-過3

Gaismas kalnā staltā pils.
 光-属 山-位 高い 城

奴隷の綱につながれた民がやってきた

英雄たちが死に倒れていった

すぐに沈んでいった すぐに消えていった

光の山の城の中に 高い城が

このようにアスペクト対立には、時間補語の格表示と、文レベルで現れる複数の動作の時間関係であるタクシスが関係している。

2.6. アスペクト対立の相対性

PFV・IPFVのアスペクト対立が、その意味的対立において中和されやすいことは2.5.2.で述べた。ここで、アスペクト対立をなさない接頭辞動詞や基動詞、特に文脈においてどちらのアスペクトも表す両アスペクト動詞の位置づけを見ると、アスペクト対立が相対的な概念であることがわかる。

2.6.1. アスペクト対立に関与しない接頭辞動詞

ラトヴィア語のアスペクト論では、アスペクトペアの形成法がスラヴ諸語（特にロシア語）のそれと対照されることが多い。ロシア語のアスペクトペアの形成の主な手段には接頭辞法と接尾辞法がある。接頭辞法は、接頭辞によりIPFV（ロシア語では不完了体）の基動詞をPFV（ロシア語では完了体）化する方法である。

čitat' 「読む (IPFV)」 → pročitat' 「読む (PFV)」

ラトヴィア語でも形式的意味の接頭辞の付加により、同様のことが言える。

lasīt 「読む (IPFV)」 → izlasīt 「読む (PFV)」

ロシア語の接尾辞法では、接頭辞付加により意味修正がなされてPFV化された接頭辞動詞にIPFV化の接尾辞（ここでは-yva-）を加え、アスペクトペア（囲み部分）が形成される。

čitat' 「読む (IPFV)」 → perečitat' 「読み返す (PFV)」 → perečityvat' 「同 (IPFV)」

この接尾辞法は、語彙的なアスペクトの意味が現れる接頭辞動詞にも適応され、語彙的なアスペクト (アクションスアルト) の中における文法的なアスペクト対立の表現 (囲み部分) に寄与する。

čitat' 「読む (IPFV)」 → dočitat' 「読みきる (PFV)」 → dočityvat' 「同 (IPFV)」

čitat' 「読む (IPFV)」 → počitat' 「ちょっと読む (PFV)」 → počityvat' 「同 (IPFV)」

čitat' 「読む (IPFV)」 → začitat'sja 「読みふける (PFV)」 → začityvat'sja 「同 (IPFV)」

ロシア語のアスペクト対立の表現をモデルにすると、ラトヴィア語には接尾辞法がなく、接頭辞付加により異なる語彙単位となった接頭辞動詞はアスペクト対立の外に置かれる。例えば、上で挙げたラトヴィア語の接頭辞動詞は、以下のような様相を見せる。

lasīt 「読む (IPFV)」 → pārļasīt 「読み返す (PFV/IPFV)」

lasīt 「読む (IPFV)」 → aizļasīt 「(一定のところまで) 読みきる (PFV)」

lasīt 「読む (IPFV)」 → palasīt 「ちょっと読む (PFV)」

lasīt 「読む (IPFV)」 → aizļasīties 「読みふける (PFV)」

アスペクト対立に関与しないラトヴィア語の接頭辞動詞は、伝統的に量・時間的意味に分類される接頭辞、そしてアスペクトに関与せずに動詞の意味を修正する、その他の語彙的意味の接頭辞を持つ動詞の場合である。量・時間的意味の接頭辞を持つ動詞は、その語彙的意味から進行としての意味を持たず、時間的制限を受けているため PFV の動詞となる。ここに、『標準語文法』における記述をまとめる (『標準語文法』1959, 572)。

アスペクトペアに関与しない PFV の接頭辞動詞

① 動作の開始

iegribēties 「欲し始める」 (gribēt 「欲する」) iesāpēties 「痛み始める」 (sāpēt 「痛む」)

② 動作の低い集中性

pajokoties 「ちょっと冗談を言う」 (jokot 「冗談を言う」)

apsaldēties 「ちょっと凍える」 (saldēties 「凍える」)

③ 動作の限界の達成、完全性、過度性

nosēdēt 「(一定時間) 座る」 (sēdēt 「座っている」)

pārsmieties 「笑い過ぎる」 (smieties 「笑う」)

④ 動作が主体全体、または対象全体に及ぶ

apmirt 「絶滅する」 (mirt 「死ぬ」) piecept 「(大量に) 揚げる」 (cept 「揚げる」)

⑤ 適応の動作

ievalkāt 「着慣らす」 (valkāt 「着ている」)

iejāt 「(馬を) 乗り慣らす」 (jāt 「(馬に) 乗る」)

以上の意味を持つ接頭辞動詞が、対応の IPFV を持たない PFV の動詞とされる。

対応の PFV を持たない IPFV の動詞もある。伝統的な意味分類で挙げられる 3 つの意味が、基動詞の語彙的意味を部分的に残しているのに対し、以下に挙げるのは、大幅に意味を変えられ、語彙化された接頭辞を持つ動詞である。『標準語文法』より一部の例を挙げる (『標準語文法』1959, 572-574)。

アスペクトペアを持たない IPFV の接頭辞動詞

① 接頭辞なしではあまり使われない動詞

pazīt 「知り合いである」 atzīt 「認める」 atzīties 「告白する」 (zīt 「気づく」)

② 基動詞の意味と大幅に異なる動詞³⁴

aizstāvēt 「守る」 pārstāvēt 「代表する」 (stāvēt 「立っている」)

pārdot 「売る」 izdot 「出版する」 piedot 「許す」 (dot 「与える」)

③ 名詞派生の動詞

nozīmēt 「意味する」 (nozīme 「意味」) piezīmēt 「しるしをつける」 (piezīme 「メモ」)

ietekmēt 「影響する」 (ietekme 「影響」) attīstīt 「発展させる」 (attīstība 「発展」)

izskatīties 「…のように見える」 (izskats 「外見」)

saturēt 「含む」 (satura 「内容」)

PFV の意味を失う接頭辞動詞には、以下のような動詞がある (『標準語文法』1959, 574-575)。

PFV の意味を失う接頭辞動詞

① ある客体に複数の主体の動作が及ぶ発話の意味の ap-動詞や相互性を表す sa-動詞

apmelot 「(複数主体が) 嘘をつく」 (melot 「嘘をつく」)

aprunāt 「(複数主体が) 悪口を言う」 (runāt 「話す」)

sarunāties 「話し合う」 (runāt 「話す」)

② 能力を表す pa-動詞

panest 「運べる」 (nest 「運ぶ」) pavilkt 「引ける」 (vilkt 「引く」)

③ 動作の反復、以前の状態への回帰、補償を表す at-動詞

³⁴ 「意味が大幅に異なる」とは、基動詞が接頭辞の空間的意味、形式的意味、量・時間的意味のいずれの意味も付与されない場合である。このような接頭辞動詞と基動詞の意味的関連性を特定することは難しい (基動詞 stāvēt 「立っている」と接頭辞動詞 sastāvēt 「構成される」や pārstāvēt 「代表する」、aizstāvēt 「守る」)。一方で、基動詞 dot 「与える」と pārdot 「売る」では、意味が大幅に異なり意味的関連性は薄いように見えるが、接頭辞 pār- 「移」の空間的意味が残っていると解釈できる。このような接頭辞が語彙化した接頭辞動詞には、ドイツ語やロシア語の動詞をモデルにした翻訳借用が多い。

- atdarināt「模倣する」(darināt「作る」) atkārtot「繰り返す」(kārtot「する(多義的)」)
 atstāstīt「語り繰り返す」(stāstīt「語る」) atmaksāt「払い戻す」(maksāt「払う」)
 ④ 主体と客体の変化と動作の反復、客体全体へ及ぶ動作を表す pār-動詞
 pārģērbt「着せ変える」(ģērbt「着せる」) pārskatīt「概観する」(skatīt「見る」)

対応の PFV を持たない IPFV の接頭辞動詞では接頭辞が基動詞の意味修正を行わない個別的な接頭辞動詞であったのに対し、PFV の意味を失う接頭辞動詞では、接頭辞によりある程度規則的に基動詞の語彙的意味が変えられている。

接頭辞動詞が PFV であるわけではないこと、また接頭辞の有無によるアスペクト対立が、すべての基動詞と接頭辞動詞に及んではないことを確認した。

2.6.2. “無アスペクト”の動詞と文脈

2.6.1.で挙げた接頭辞動詞は、形態的に接頭辞を持ちながらもアスペクト対立には組み込まれない。これらの動詞の一部は PFV・IPFV どちらのアスペクトも表しうるとされる。

PFV・IPFV どちらのアスペクトも表す動詞は、アスペクト対立に中立な動詞とされ、一般に「両アスペクト (divu veidu, divveidu)」動詞 (『標準語文法』1959, Staltmane 1958d)、または「アスペクトのない (bez vidovogo značenija)」動詞 (Endzelīns 1971, 651) と呼ばれる。スラヴ諸語のアスペクト論においても、アスペクト対立に中立な動詞、言い換えればどちらのアスペクトも表しうる動詞は一般に biaspectual、または double-aspect (Magner 1963) の動詞とされる。日本語による用語では両体動詞である。

これらの動詞を両アスペクトではなく、無アスペクト (anaspectual) の動詞と呼ぶ方がよいという立場も少数ではあるがロシア語学で存在する (Magner 1963, Timberlake 2004)。Timberlake はその理由を、これらの動詞が「アスペクト体系の中で明確な位置づけ (clear alignment) を持っていない」からとしている (Timberlake 2004, 408)。

これらの動詞は具体的な文脈の中で PFV か IPFV の意味に特定できる、というのがアスペクト対立に中立な動詞を巡る一般的な見解である。この見解は、具体的な文脈があれば両体動詞は必ず一方のアスペクト的意味を持つことから、両体動詞をアスペクト対立に中立な動詞とすることにさえ懐疑的な意見 (Isačenko 1960, 143-144, Ušakova 2003, 71 など) において顕著である。

スラヴ諸語の辞書記述では、主に借用語の動詞のアスペクトの特定 (完了体か不完了体か、両体か) が辞書によって様でないことがある (ポーランド語: Kudlińska 1988, 122-123, ロシア語: 『ロシア語逆引き辞典 (Obratnyj slovar' russkogo jazyka)』1974)。これは、アスペクトが完了体なのか、不完了体なのか、または両体なのかの特定が、文脈を考慮に入れるのか、または文脈を考慮に入れず動詞の語彙的意味によりアスペクトを特定するのかの違いによって異なる。一方でこれは、アスペクト対立が文法カテゴリーであるスラヴ諸語で

さえ両体動詞の位置づけに絶対的な側面がなく、ある動詞は“より PFV 的”、ある動詞は“より IPFV 的”といったように、解釈的な側面があることを示している。

アスペクト対立に中立であるこれらの動詞を両アスペクトの動詞と呼ぶか、無アスペクトの動詞と呼ぶかは細かな用語上の問題である。しかし、本論文筆者が考えるに、anaspectual と比較して biaspectual という用語は、アスペクト対立がアスペクト体系の中心であり、動詞が文脈においては PFV・IPFV のどちらかに特定できることを前提としている。

ラトヴィア語では、アスペクト対立が及ぶ動詞の範囲が限られていること、またアスペクト対立自体が中和されることが多いにも関わらず、動詞が PFV か IPFV のどちらかに分けられることを前提とし、文脈の中で対立アスペクトを特定しようという試みが大きな意味を持つかは未知である。よって、少なくともラトヴィア語においては無アスペクトという概念がより適切であると考え、以後ラトヴィア語の動詞は“無アスペクト動詞”と呼ぶ。

ラトヴィア語では、具体的文脈において PFV・IPFV を特定することが可能な場合がある。例えばアスペクト対立の片方の項に特徴的な副詞や時間補語を含む補語、タクシスが対立アスペクトを特定する基準となる。

先行研究では Kalnača が、また部分的に Ozola も文脈における無アスペクト動詞のアスペクトの特定の問題を論じている (Kalnača 1998, 2004, Ozola 1984)。Kalnača も Ozola も文脈におけるアスペクトの特定を論じているが、確実に PFV と解釈される用例を出すことで、もう片方の用例を“より IPFV 的に”解釈させているように思える。

例文 2-40 から例文 2-43 では、無アスペクトの接頭辞動詞 pārdot 「売る」(基動詞 dot 「与える」) と pārlasīt 「読み返す」(基動詞 lasīt 「読む」) が文脈により PFV・IPFV の対立を示していると Kalnača はしている。例文 2-40 と例文 2-42 を IPFV、例文 2-41 と例文 2-43 を PFV として示し、文脈を揃え(「昨日」「店で」)、動詞の補語で(「パンを」vs「パンを全部」、「新聞を」vs「最新の新聞を全て」)、アスペクト対立を説明している。

例文 2-40 (Kalnača 1998, 250)

Vakar veikalā pārdeva maizi.
昨日 店-位 売る-過3 パン-対

昨日店でパンを売っていた(売った)。(Kalnača の解釈では IPFV)

例文 2-41 (Kalnača 1998, 250)

Vakar veikalā pārdeva visu maizi.
昨日 店-位 売る-過3 すべての パン-対

昨日店でパンを全部売った。(Kalnača の解釈では PFV)

例文 2-42 (Kalnača 2004, 19)

Vakar pārlasīju laikrakstus.
昨日 読み返す-過1単 新聞-複対

昨日私は新聞を読み返していた(読み返した)。(Kalnača の解釈では IPFV)

例文 2-43 (Kalnača 2004, 19)

Vakar pārlasīju visus jaunākos laikrakstus.

昨日 読み返す-過1単 すべての 最新の-比 新聞-複対

昨日最新の新聞を全て読み返した。(Kalnača の解釈では PFV)

しかし例文 2-40 と例文 2-42 で用いられている補語だけでは IPFV と判断することが難しい。例文 2-40 と例文 2-42 で用いられている動詞がここで IPFV と解釈されるのは、比較される例文 2-41 と例文 2-43 で用いられている動詞が、viss「すべて」を含む補語を伴い、PFV と解釈されるからである。ここでは一方の例文が確実に PFV と解釈されることで、もう一方の例文が相対的に IPFV と捉えられている。Kalnača は動詞の補語の具体性・一般性という意味的対立によりアスペクトの違いを見出しているが、2.5.2. で見たように、この意味対立は話者の意図に応じた具体化・一般化であり、問題が多い。

Ozola は、無アスペクトの接頭辞動詞 pārbaudīt「点検する」を例にアスペクト対立を説明している。ここでは PFV の例として受動態が挙げられている。ラトヴィア語の受動態では、助動詞 būt が動作の結果に着目した複合時制（パーフェクト）の意味で用いられ、助動詞 tikt が単純時制で用いられる（『標準語文法』1959, 552-553）。本論文筆者の作例である例文 2-46 は、助動詞 tikt（例文 2-46 では変化形 tiek）が恒常的な動作、または進行中の動作を示す受動態である。

例文 2-44 (Ozola 1984, 124)

Skolotājs pārbauda skolēnu dienasgrāmatas.

先生 点検する-現3 生徒-複属 学習簿-複対

先生は生徒たちの学習簿を点検する（点検しているところである）。(Ozola の解釈では IPFV)

例文 2-45 (Ozola 1984, 124)

Skolēnu dienasgrāmatas ir pārbaudītas.

生徒-複属 学習簿-複 be-現3 点検する-受過

生徒たちの学習簿は点検されている（点検が終わっている）。(Ozola の解釈では PFV)

例文 2-46 (作例)

Skolēnu dienasgrāmatas tiek pārbaudītas.

生徒-複属 学習簿-複 受-現3 点検する-受過

生徒たちの学習簿は点検される（点検されているところである）。

例文 2-45 が PFV と見なされるのは助動詞 būt（例文 2-45 では変化形 ir）が示すパーフェクトの意味によるものであり、そのおかげで例文 2-44 は IPFV と解釈されやすい。しかし例文 2-46 を見ると、進行中の受動の動作を示す助動詞 tikt が用いられ、動詞の変化形（受動過去分詞 pārbaudītas）自体に PFV の意味があるのかを判断することは難しく、アスペク

トの意味はないとも解釈できる。

補語の具体性・一般性、時制によるアスペクト対立の表現よりも有効と考えられるのは、2.5.3.で考察した時間補語の格の違いである。例えば無アスペクト動詞 *apgūt* 「学ぶ、習得する」は対格と位格の時間補語をとることができる。時間対格と結びつく動詞は継続する動作を示し、IPFV の意味を持つものに対して (*apgūt valodu divus mēnešus* 「言葉を2か月間学ぶ」)、時間位格と結びつく動作は限定された時間内に行われる動作を示し、PFV の意味を持つ (*apgūt valodu divos mēnešos* 「言葉を2か月で習得する」)。

pārdot 「売る」も同様に、例文 2-47 では時間対格と結びつき IPFV、例文 2-48 と例文 2-49 ではそれぞれ時間位格と「時間単位の属格+*laikā*」と結びつき PFV と捉えられる。

例文 2-47 (LD. 05.04.2011)

Pēc atgriešanās Latvijā divus gadus pārdeva IT infrastruktūras risinājumus.
後で 帰国 ラトヴィア-位 2 年-複対 売る-過3 インフラ-属 解決-複対

ラトヴィアに帰国後、(彼は) 2年間 IT インフラソリューションを販売した。

例文 2-48 (BD. 15.02.2010)

(..) *audzēknis (..) no astoņiem koka putniņiem pāris stundās pārdeva pusi.*
生徒 から 8 木-属 鳥-複-指 2,3 の 時間-複位 売る-過3 半分-対

その生徒は8羽の木彫りの鳥(指小形)のうち半分を2,3時間で販売した。

例文 2-49 (BNS. 26.02.2009)

(..) *visas biļetes pārdeva nepilnas stundas laikā.*
すべての チケット-複対 売る-過3 未満の 時間-属 時-位

チケットはすべて1時間も売られなかった。

無アスペクト動詞 *notikt* 「起こる、行われる」も、対格と位格のどちらの時間補語とも結びつく。例文 2-50 では時間対格が、例文 2-51 では時間位格が用いられている。

例文 2-50 (LA. 23.02.2004)

Svinības notika dažas stundas. Tika teikti daudzi tosti (..).
お祝い-複 起きる-過3 数 時間-複対 受-過 言う-受過 たくさんの 乾杯の挨拶-複

宴は数時間行われた。たくさんの乾杯の挨拶が述べられた。

例文 2-51 (RB. 16.09.1999)

Amerikāņi jau pieraduši pie šīm stihiskajām nelaimēm, tāpēc evakuācija
アメリカ人-複 すでに 慣れる-能過 に この 自然の 不幸-複 なので 避難

notiek dažās stundās (..).
起きる-現3 数 時間-複位

アメリカ人はすでにこういった自然災害に慣れているので、避難も数時間で行われる。

例文 2-52 と例文 2-53 では、*process* 「プロセス」を主語とするこの動詞が時間対格とも時

間位格とも結びついている。

例文 2-52 (D. 17.07.2009)

(..) jānoslēdz līgums ar kapsētas pārzini par kapavietas uzturēšanu. Lai arī
 締結する-義 契約 と 墓地-属 管理人 について 墓場-属 管理 にも関わらず
 šis process notiek jau gandrīz pusgadu, rīdzinieki (..) nav informēti (..)
 この プロセス 起きる-現3 すでに ほぼ 半年-対 リーガの人-複 否-be-現3 情報を与える-受過
 par to, kā līgumu slēgšana notiek (..).
 について それ どのように 契約-複属 締結 起きる-現3

墓地の管理について墓地の管理人と契約を結ばなければいけない。このプロセスは半年にわたるにも関わらず、契約の手続きがどのように行われるか、リーガ市民は知らされていない。

例文 2-53 (PL. 14.07.2003)

Vēzis aug, mainot čaulu. Šis process notiek dažū stundu laikā (..).
 カニ 育つ-現3 変える-副 殻-対 この プロセス 起きる-現3 数 時間-複属 時-位
 カニは殻を変えながら成長する。このプロセスは数時間で行われる。

ここで例文 2-50 と例文 2-51 に戻る。例文 2-50 で示されているような宴の継続時間ではなく、「宴は数時間で行われた」のように宴の所要時間が話題となる文脈もありうるだろう。しかし『新聞図書館』では、この名詞を主語とする動詞 notikt が時間位格と結びついている用例は見つからなかった。同様に、例文 2-51 のように「避難 (evakuācija)」を主語とする動詞 notikt と時間対格が結びついている用例は見つからなかった。その理由には「宴」が所要時間よりも継続時間を前提とし、人を退去させるという目的を持った行為である「避難」が継続時間よりも所要時間を前提とするのが普通であるからと考えられる。これは、動詞だけでなく主語の語彙の意味もまた対立アスペクトに関与していることを示唆している。

2.6.3. 対立アスペクトと動詞の語彙の意味

『標準語文法』では主に文脈を排除した語彙の意味だけでアスペクトを特定している。例えば、無接頭辞動詞 kļūdities 「間違える」、vainagoties 「(よい結果に) 終わる」や合成動詞³⁵ divkāršot 「二倍にする」、trīskāršot 「三倍にする」、pilnveidot 「完全なものにする」といったアスペクト対立をなさない動詞は、その語彙的な意味から、対立を持たない PFV の動詞とされる(『標準語文法』 1959, 575)。また、atrast / rast 「見つける」、pazaudēt / zaudēt 「失う」、iegūt / gūt 「得る」、paveikt / veikt 「行う」、iedot / dot 「与える」のように、接頭辞の有無でアスペクト対立をなしていても、元の語彙の意味に PFV 性が認められる動詞もある(『標準語文法』 1959, 570)。この場合、基動詞がより抽象的な用法で、接頭辞動詞がより具体的な用法で用いられ、PFV と IPFV の動詞の違いは「文体的差異」となり、接頭辞は「PFV 性の強調」をしているだけであるとされる(『標準語文法』 1959, 570)。

³⁵ 合成動詞 (salikti verbi) は、副詞や形容詞、数詞が前接してできた動詞である(『標準語文法』 1959, 370)。

『標準語文法』による「PFV 性の強調」という説明から、対立をなす動詞の IPFV の項にも、その動詞の語彙的意味により PFV 性が認められることがわかる。つまり動詞の語彙的意味に PFV 性が見られても、PFV・IPFV のアスペクトペアをなす動詞がラトヴィア語には存在する。文脈や話者の視点を考慮に入れた実際の使用では、IPFV の動詞は進行中の動作ではなく、反復される複数回の動作や引き伸ばされた動作を示す。これらの動詞以外にも *paņemt / ņemt* 「取る」、*apsēsties / sēsties* 「座る」や *piecelties / celties* 「立ちあがる」など、その語彙的意味が進行中と認識しづらい動詞が挙げられる。

例文 2-54 と例文 2-55 では IPFV の動詞が使われている。例文 2-54 では副詞 *nemitīgi* 「絶えず」、例文 2-55 では動詞の反復などの文脈により、動詞を見ただけでは進行中と捉えられない動作が、反復する進行中の動作として表現されている。

例文 2-54 (VZ. 22.12.1998)

Viņš nemitīgi sēdās un cēlās no viena krēsla, lai pārsēstos uz cita.
 彼 絶えず 座る-過3 そして 立つ-過3 から ある 椅子 ために 座り直す-願へ 他の
 他の椅子に座り直そうと、彼は絶えずその椅子に座ったり、立ったりしていた。

例文 2-55 (LA. 17.03.2004)

(..) *viņš sēdās un cēlās, sēdās un cēlās, dūres vīstīdams.*
 彼 座る-過3 そして 立つ-過3 座る-過3 そして 立つ-過3 拳-複対 握る-半
 彼はイライラして、腰掛けては立ち上がるを繰り返していた。

例文 2-56 では動詞 *aiziet* 「去る」が「引退する」の意味で使われている。接頭辞 *aiz-* は基動詞 *iet* 「行く」に対し、空間的意味の「離」を加えている。「去る、引退する」という語彙的意味は進行中の動作と捉えにくく、一見すると PFV 性が認められやすい。しかし、「1 日で (時間位格) 引退」と「1,2 年かけて (時間対格) 引退」の場合、時間補語の格表示の違いにより PFV・IPFV の対立が生まれ、後者が示す動作はプロセス化される。本来ならば副詞を用いた分析的表現で IPFV を表現 (例えば *iet prom* 「去る」) するはずだが、ここではどちらの「引退する」にも接頭辞動詞が用いられている。

例文 2-56 (S. 11. 2008)

(..) *no lielā sporta aizgāja vienā dienā. Patiesībā no īsti lielā sporta*
 から 大きな スポーツ 去る-過 1 日-位 実際には から 真に 大きな スポーツ
jāaiziet gadu, divus. Pakāpeniski samazinot treniņu skaitu nedēļā, pārejot uz
 去る-義 年-対 2 徐々に 減らす-副 練習-複属 数-対 週-位 移行する-副へ
vieglāku slodzi.
 より軽い 負荷

[ソ連時代] 競技スポーツからは 1 日で引退するものだった。しかし実際には、[急に運動の負荷をなくすことが逆に体の負担になることから] 真の競技スポーツからは 1,2 年かけて引退するべきである。週当たりの練習数を徐々に減らして、より軽い負荷に移行しながら。

このように動詞の語彙的意味が進行と捉えにくい動作であってもアスペクト対立を成し、進行以外の反復や、時間補語の格表示といった文脈により、動作をプロセスとして捉えることが可能であり、それぞれの対立アスペクトが相対的に機能している。

2.7. アスペクトと時制

本章の最後に、アスペクトと時制の関係について簡単に触れる。

時制は発話時点の現在を軸として、またその他の時間点に関係づけられた、状況の時間を示す。一方でアスペクトは他の時間点に関係づけられず、状況の内的時間構造を示す。

ラトヴィア語の時制には、現在・過去・未来がある。さらにそれぞれに現在の発話時点を中心とした単純時制、現在の発話時点の他にもう一つの時間点を基準とし、それよりも以前に起こる状況を示す複合時制が存在する。単純時制では、現在・過去・未来は語尾によって統合的に表されるのに対し、複合時制は分析的に表される（助動詞 *būt* の現在・過去・未来の時制形+能動過去分詞）。

複合時制は、基準点よりも以前に起きた状況の結果が何らかの形で残っていることを示すことから、「以前に起きた動作の結果の評価」(Kalnača 2011, 37)といった結果残存を示し、パーフェクトに相当する。

アスペクトと時制の関係について、アスペクト対立を持つ動詞が複合時制で用いられる場合、その動詞が IPFV アスペクトであれば、過程そのものに焦点が置かれ、動作の長さや反復が表されるのに対し、PFV アスペクトでは、動作の PFV 性や結果性が表されるとされる (Lokmane 1988, 116)。つまり例文 2-57 と例文 2-58 のように、アスペクト対立を持っている動詞は、複合時制においてもその対立を保つことになる。

例文 2-57 (作例)

Esmu lasījis šo grāmatu, tāpēc zinu saturu no galvas.
 be-現1単 読む-能過 この 本-対 なので 知っている-現1単 内容-対 から 頭
 私はこの本を読んだことがあるので、内容を暗記している。

例文 2-58 (作例)

Esmu izlasījis šo grāmatu, tāpēc zinu saturu no galvas.
 be-現1単 読む-能過 この 本-対 なので 知っている-現1単 内容-対 から 頭
 私はこの本を読み終わったことがあるので、内容を暗記している。

アスペクトの PFV と時制のパーフェクトは用語が似ており、どちらも“完了”という概念を含んでいる。しかしアスペクトと時制の“完了”はそれぞれ性格の異なるものである。対立アスペクトにおける“完了”は、単純時制・複合時制、さらにその現在・過去・未来においてもその対立が保たれる。その一方で、時制における“完了”、つまり複合時制が示す“完了”は、ある動作が行われた時点を時制の参照点によって前にずらすだけであり、

その動作自体は PFV でもあれば IPFV でもある。その動詞が無アスペクト動詞であれば、主に文脈によってその対立アスペクトが特定される。つまり、アスペクト対立をなす動詞は複合時制においてもその対立を残す。

2.8. 第2章のまとめ

本章では、ラトヴィア語のアスペクトを概略した。

PFV・IPFV のアスペクト対立の形態的対立は、接頭辞の有無という絶対的対立である。それに対し、意味的対立はより複雑である。最も弁別的と思われる「非進行・進行」の対立は、一般的な事実を述べる際には中和されてしまう。「具体・一般」といった対立は、話者による事象の「具体化・一般化」といえる。ある項を「具体」と対比せずに「一般」と、逆に「一般」と対比せずに「具体」と言うことは難しく、これは相対的な意味対立である。本章で論じた「テーマ・レーマ」や「結果達成・結果達成の過程」といった他の意味的対立も文脈の中では常に顕在化するわけではない。

アスペクト対立は、時間補語の格の違いや、文レベルで示される動作間の時間関係のタクシスにも関係し、これらの統語的な特徴は文脈における無アスペクト動詞の対立アスペクトの特定に一定の役割を果たす。

アスペクト対立に中立な無アスペクト動詞は、動詞の語彙的意味のみでアスペクトを特定するのが不可能である。時間補語の格表示の違いやタクシスなどの文脈がない限り、対立アスペクトの特定はあくまで研究者の解釈にすぎない。そして PFV か IPFV どちらか一方しか表しえないということが前提で2つの例文を比較するため、おのずと“より PFV 的”、または“より IPFV 的”と解釈される。このように無アスペクト動詞の解釈は、非絶対的な解釈にならざるを得ない。

アスペクト対立を持つ動詞には、元々の語彙的意味がより PFV に近い動詞もある。この場合の IPFV の基動詞は文脈の助けによって PFV 的な動作の反復を示したり、時間補語の格表示によって動作をプロセス的に示すことができる。これらの動詞のアスペクト対立では、動詞の語彙的意味に PFV 性が認められること自体、アスペクト対立を持つための障害にはならず、PFV・IPFV それぞれの動詞は相対的にアスペクト対立を表現していることになる。

アスペクト対立をなす動詞の意味対立においても、無アスペクト動詞のアスペクトを巡る解釈においても、アスペクト対立はその内容も解釈も、相対的な概念である。

このアスペクト対立の相対性は、言語文化論で批判される借用語の PFV 化の接頭辞付加を次章で検討し、再解釈するために必要な概念となる。